

# 現代日本における『老子』の受容

——加島祥造の著作を中心に——

谷 中 信 一

## 序

かつて90年代初め、いわゆるバブル経済が崩壊し日本社会が大きな転換点に立たされたとき、ベストセラーとなったのが中野孝次(1925-2004)著『清貧の思想』(草思社1992)であった。

思うに、同種の著作としては、加島氏の『老子』に関する一連の著作群がこれに次ぐといつてよいであろう。それらはともに、物質文明に毒され、競争社会に身を置き、欲望にまみれる生き方の中に、人びとの幸せはあり得ないことを説き、日本人が忘れてきてしまった心の持ち方の回復を教えようとしているからである。

では彼らはどのような生き方をよしとしたのだろうか。中野は、これを歴史上の日本の文人の生き方の中に範を得ようとした。一方、加島はこれを中国古典の中に求めた。いずれも、過去の伝統や古典の中にこれからの日本人の生き方があると言うのである。

ところで、中野の専門はドイツ文学である。彼は、大学教授としてドイツ文学を講じながら、一方で多くの翻訳を手がけ、その傍ら作家としても活動していた。『清貧の思想』は、氏が67歳の仕事であるが、彼の著作中最も多く読者を獲得した代表作である。本書

によって中野孝次の名は広く日本中に知られることとなった。

一方、加島は英文学者として、やはり大学で英米文学を講じる傍ら、中野同様に多くの翻訳を手がけてきた。そして彼が大学退職後、それも84歳という高齢で出版した『求めない』(小学館2007)が、多くの読者を獲得することとなった。

中野は宮大工の次男坊として、加島は神田の商家の末っ子として生まれている。どちらもいわゆるインテリ階級とは縁遠い出身と育ちである。

また、西洋文学の研究に半生を費やしてきた彼らが、晩年日本や東洋の思想にあなたも回帰したかのように没頭し、その成果を広く一般社会に問うたことも共通している。

中野の『清貧の思想』がベストセラーになったのは、日本社会全体が「Japan as Number One」などとおだてられていわゆるバブル経済に踊っていたそのさなか、突然の株安と地価の下落で一瞬の後に深い闇を見ることとなったまさにその時であった。この時、中野は、心ある多くの日本人に己の脚下を見つめること、言い換えれば日本の伝統文化の原点にもう一度立ち返ること求めたのである。彼は、日本人の伝統思想の中には、贅沢と浪費を悪とし、物質

的豊かさよりも精神的豊かさの中にこそ人としての生き甲斐がある  
と考える価値観が脈々と受け継がれてきていることを明らかにし、  
それを「清貧の思想」と呼んだのである。

精神的豊かさを求める心は、たとえ金銭的に貧しくとも、それを  
貧しいと思わずにいられる意識に通じる。そしてこうした意識を持  
てば、誰に対しても卑屈になることはない。貧しいけれども必要な  
ものがそろっていれば、これ以上求める必要はない。だから過剰に  
求めることはしない。そこにこそ落ち着いたそして満ち足りた生活  
がある。些かも不安に苛まれない。こうした清貧の味わいを生涯を  
通じて味わい尽くすところにこそ、人間としての本当の豊かさがあ  
り、人生の充実があると、彼らは説いた。竜安寺のつくばい等に見  
られる「吾れ唯足るを知る（吾唯知足）」<sup>2)</sup>はまさにその典型とい  
べき言葉である。

90年代のいわゆる「失われた10年」を過ごした日本は、21世紀を  
迎えても二度とかつてバブル経済に沸いた時のような活気を取り戻  
すことはなかった。こうして二〇〇五年に加島祥造の『求めない』  
が出版された。

この間、日本経済は、価格破壊<sup>3)</sup>などということがいわれられ食料  
品や衣料品などの生活関連物資の価格が相次いで下落するというい  
わゆるデフレ現象が起き、それにつれて労働者の賃金も切り下げを  
余儀なくされた。リストラ Restructure<sup>4)</sup> という言葉が流行し、正  
規労働者ですら退職や転職を余儀なくされた。代わって、非正規労働  
者、いわゆる派遣労働者が企業に多く雇い入れられることとなっ  
た。人件費を圧縮するためである。こうして労働者の生活レベルの  
低下は次第に深刻になっていった。職を失う不安におののく労働者、

賃金の切り下げが日常的となってしまった労働者、彼らは住宅ロー  
ンの返済にも滞り、子弟の教育費もままならず、生活は苦しさを増  
すばかりとなっていった。

実はこの10年間、一九九五年には一万人を超えていた日本の交通  
事故死者数は減り続け、二〇〇九年にはとうとう五千人を下回った  
のであるが、これとは対照的に、自殺者は一九九八年から二〇〇九  
年までの11年間の間、三万人を下回ることなかった。なんと近年  
の自殺者は交通事故死者の6倍以上に達するのである。

これと同時に、マスメディアで過労死が報じられることも少なく  
なくなった。<sup>5)</sup> Karoshi<sup>6)</sup> は今やそのまま世界に通用する言葉となっ  
てしまったと言われる。また自殺や過労死の予備軍と言われる鬱病  
などの精神疾患に悩む人びとが増え続けていることも、この15年間  
の日本における大きな変化といってもよいであろう。

さて、そのような時期に加島氏はタイオイスト<sup>7)</sup>として登場した。彼  
は自らが出会った中国古典『老子』の魅力について熱っぽく語り、  
そうしてこれまでの研究者による『老子』解釈がいかに面白みのな  
いものであるかを述べ、その不満から彼自身『老子』全文を現代日  
本語に翻訳するに至る。そこには、かつてなかったほどの自由な解  
釈を縦横に示すとともに、自らをタイオイストと名乗り、さながら老  
子の如く「隠君子」として都会を遠く離れた谷間の村里に一人ひっ  
そり暮らす一人の知識人の姿があった。彼は、自己の思想を、都会  
に暮らす読者に、簡潔な韻文で語りかける。こうしてできたのが詩  
集『求めない』であった。本書は出版されるや瞬く間に多くの読者  
の支持を得ることとなった。ある読者はこれを「仙人の説教に読め  
た（本人の風貌から）」<sup>8)</sup>と言っている。

(一) 加島祥造と『老子』の出会い

加島と『老子』の出会い、意外にも英訳された『老子』に始まる。彼が元来英米文学者であることを思えば、あながち偶然ともいえまい。だが彼が英訳『老子』によって初めてそのおもしろさを知ったということについてはやや注意を要するであろう。なぜなら、彼はそれまで和訳『老子』を読んでいかなかったというわけではなく、ただ読んでも少しも感動しなかったというのであるから。彼は次のように言う。

私も、若いときは孔子は少し教わったが、老子は知らなかった。青年期は英米文学に深入りして、東洋思想から遠ざかってきた。六十になって、偶然に老子『道德経』の英訳を読んだ。そこに展開する考え方とイメージによって、私は「タオ」を知り、目の覚める思いだった。：西洋に渡った老子から彼を知ったのだ。その「タオ」はわが国に伝わっている老子や老荘思想とは全く違う姿と心を示すものだった。：新しい老子の「タオ」と、旧来の老子の「道」とはイメージも中身もはっきり違う。：「タオ」とは何か。一口に言えば、宇宙エネルギー<sup>(7)</sup>みたいなものだ。：老子に自然の生命力を感じた。：老子は人間の生命への大きな温かな思いやりを持ち、私たちにそのタオの働きを気づかせようとする、タオイズム<sup>(8)</sup>はその点でヒューマニスティックな思想なのだ。(⑥12-14頁)

つまり『老子』との出会いは偶然ではあったけれども、それまで『老子』について抱いていたイメージからはほど遠い魅力を見出すことができた。しかもその出会いは、後の人生において実に決定的であったと言う。

ところで、日本の伝統的な『老子』研究者はあくまでも中国先秦時代の諸子百家思想の代表的文献の一つとして読んでいくわけであるから、主観を離れて客観的かつ実証的にその思想内容を分析研究することが不可欠である。その意味では「自由な解釈」から最も遠いところにいるのは当然のことと言わねばならない。ところが、彼は、そのことがかえって老子や荘子の本来の魅力を台無しにしてしまったと言うのである。そのうえで、彼はわが国における伝統的な老子解釈に依る限り到底知ることが出来なかった思想内容として、先に引用したような老子の「自然の生命力」・「生命への温かな思いやり」に気付き、その「タオイズム」こそ「ヒューマニスティックな思想」があると言う。

そしてまた次のようにも言う。

○：神秘的な命のエナジーを感じた(③21頁)

：老子に出会ったせいで：やっと少しだけ「自然の静けさ」

を味わいだした。(③34頁)

○：「風を見た」という体験が老子の思想とイメージに通じるという思いがあった。(③36頁)

加島は、西洋経由だからこそ東洋の老子に出会うことができた理由として、英訳『老子』がどれも自由に老子を解釈していたからだとする。すなわち、

○アーサー・ウエレー<sup>(10)</sup>と林語堂の二冊の英訳『老子』を集中して読みはじめた。するとそこに全く新しい領域の展開するのを感じた。老子が指さしているところを明快にキャッチしはじめた。：日本の老子訳の世界とは全く違ったものがあった。：それはまことに意外な展開であった。(②98-100頁)

○一九六〇年代に、すでに三十種以上の『老子』訳があるという。一九九〇年代になると、四十を優にこえる数だとある。

：古い絶版書を入れると『老子』の英訳本は五十種以上になるであろう。：日本では少ないのに、なぜ英語圏ではこんなに多いのか、しかも二十世紀になってなぜ『老子』だけがそのようなのか。：第一は訳者たちが自分の解した『老子』を提出していることだ。：訳出するときにはそこから「自分の老子像」を抽きだしている。第二の特色は、英訳者たちが老子の存在を否定しないことだ。第三の、そして最も印象づけられた特色は、彼らが『老子』を詩(ポエトリー)ととっている点だった。：生きて伝わってくる大個性のスピリットを、自分の言葉で表現しようとする。：一九一〇年にヴィルヘルムはドイツ語版の序言で次のように言った―「『老子』の訳者とは、少なくとも原文を誤解する権利(傍点引用者注)のあるものなのだ」(一九八五年英訳版による)。(②103-110頁)

○ウェーリーの英訳した『老子』を読んで、僕はたちまち、老子に魅せられました。この出会いは鮮烈でした。とにかくまず第一に、自由な発想のすばらしさであり、第二に老子という人が、とても明快に考え方を述べる人だということでした。(③87-88頁)

「聖書に次いで最も英訳の数が多い」(3-88頁)と彼も言うように、元来『老子』は読者の数だけ解釈があり、特別に英訳『老子』だけが自由な解釈をしているわけではない。わが国でも、自分の老子像を発表する者は少なくない。

尤も『老子』の解釈は、それが生まれた中国先秦時代から今日ま

でさまざまに解釈され続けてきた。例えば、政治思想として解釈する黄老道家、養生思想として解釈する河上公注、哲学思想として解釈する王弼注、その他道教教義の中に取り入れられたさまざまな宗教的解釈、それらは皆それぞれの思想的立場から思い思いの解釈を施しているのであって、誤読とは必ずしも言えない。

要するに、彼は英訳『老子』から、図らずも明治以来のわが国に深く根付いていた欧米発の理性主義・合理主義の行き詰まりを打開するための道標を見出したというわけである。

ヨーロッパは、徹底した理性的な思考で社会の法を作り、制度も思想も作っていった。しかしそれが二十世紀になってすっかり行き詰まったというふうには、インテリは感じたようです。：老子のタオ(道)の思想には、彼らの行き詰まった精神状況を解放するものがあつた。(③89頁)

このように、現代という時代状況が老子のタオの思想を求めていると言っているのである。ここにおいて加島の思いが冒頭に紹介した現代日本の社会状況と重なってくるのが見て取れよう。

(2) 回帰その1-西洋から東洋へ

加島が強調したいのは、東洋で生活しているのに、そこではついに出会えなかつた老子に、西洋経由で出会えたことの不思議さではない。西洋はただ単に彼を老子に引き合わせたきっかけに過ぎないという。むしろ彼が強調しようとしているのは、老子によって彼自身が東洋に回帰できたことなのである。

○老子の考え方によれば、：人間はこれが絶対だという価値観によって何かをすることがなくなる。：もっと自由になる。

ここが老子のいちばんすごいところだと思う。…たどついたのは、東洋の価値観の世界（傍点引用者）であつて、そこは、西洋の二元的な価値観とは違つていた。そうしてはじめて僕は、自分のなかに本当のバランスが生まれたことを知つた。③108-109頁

○僕は最も閑でない環境に生まれ育つた。そして近代の合理主義的な世界の、いわばモデルケースでもあるアメリカ文学に深入りした。③115頁

○僕自身、西洋文学をずっとやってきて、それから東洋の詩文や思想に入つてきた。そういう例は、僕の周りでは僕と中野孝次さんぐらいのものだもの。西洋の文学を専攻する人たちには、東洋の文芸思想を無視しますし、わかろうとしない。

③34-35頁

加島は、現代文明の精神的危機状況を救うのは東洋に起源を持つ老子のタオの思想だと断言する。

確かに、『老子』には文明批判が見られる。人間の作り出した文明に人間自身が損なわれていくという視点である。現代の世界文明を作り上げたのは西洋である。その意味で、現代において文明批判を展開すれば、当然その矛先は西洋文明に向かう。この結果、彼は西洋から東洋へと回帰していったのである。

(3) 回帰その2 都会から田園へ

ところで思想的な回帰はこのように果たされたとしても、次に問題となつたのが、自分の「生」の根拠をどこに置くかということであつたようだ。そこで加島が挙げたのが田園であつた。都会は人間

の本来のあり方を損なつているとして、次のように言う。

○都会で暮らした…人間にとつては、分断された世界が当たり前でした。…都会では風景や感覚までが細分化され、結果として、その中にいる人間までがパーツの集合体に過ぎなくなつてしまふ。③21-22頁

○現代人が取り込まれている組織や情報システムや学校教育は、みんな、人が社会に應じていく能力を引き出そうとする。逆にいえば、個人の潜在的なポテンシャル<sup>12</sup>を押さえつける働きをしています。③156頁

その結果、都会では「雑念と妄想がいっぱいの人間」③34頁ばかりになつてしまつたと嘆く。

彼は、老子の文明批判と表裏の関係にある失われた本来の自己の回復に着目する。現代文明の象徴としての「都市」、このどこまでも人工的な環境の中で生活をしてはいけけない。なぜなら、人は他者との関わりの中でいつしか自己を見失い、そしていたずらに外に向かつて求めるばかりとなつてしまひ、その結果、自己を静かに省みる暇もなくあくせくと働き、そしてついには疲れ切つてしまふからだという。それこそがすなわち「タオ」の喪失ということになる。そのため彼は、老子の思想をてこに田園で「自足」して暮らすことの楽しみを次のように言う。

○山や谷は、…失われたバランスを回復させ、大いなるもの  
感覚に目覚めさせていく。

○現在、人間はここまで物質文明を発達させて、こんなにも幸福に住める条件を与えられながら、なおかつ人に不安を与えるような社会をつくつてしまつた——ということとは、何か根

本的に足りないことがあるんじゃないかと思う。…だつて幸福や安心は、すべてその人個人にある。(⑥121頁)

○近代の世界は、日本も西洋も、個人の欲望や国家の所有欲に駆られ、それを遂げることにはひたむきになってきた。その果てに二十世紀にはふたつの大戦争を起こして、世界をゆるがすにいたつた。これは個人にも国家にも、「自足」の思想が薄れてきたせいなのだ。(②200-201頁)

ところで、加島がこうしたことを自覚するに至つたのは六〇歳を過ぎてからだという。『老子』という名前そのものが暗示するように、この年齢であつたからこそ老子との出会いが可能になつたとも言えるのかも知れない。英訳『老子』を読むことで初めてそのおもしろさを知ることができたと言うのも、老子を受け入れる精神的準備が整つたからだとも言える。

加島は、こうして老子の『タオ』に回帰していくことによつて、「自分の心の中の声にしたがうことができる」(③49頁) ようになつたとして次のように言う。

○老子は、…世の中でゆつたりと生きるにはどうしたらよいかを、実践的に語っていたのです。(③107頁)

○伊那谷に住んで、老子に出会つて、そこから本当の自由というものに気がつきはじめた。社会の中で働かなくちゃいけないときは、内側の世界で一生懸命やつていてもいいんです。けれども自分の内側の自由というものに少しでも意識が向かえば、違つてくる。(⑥60頁)

加島をこうした心境に導いたのは、やはり老化と無関係ではなく、老子の『タオ』を知ることによつて、「老化というのは、命のエネルギー

ルギー(傍点引用者)が高まつていくこと…」(⑩141頁) だとして、むしろ老化を歓迎している。そしてこの最も重要な「命のエネルギー」を、「スピリチュアル・エナジー Spiritual Energy」と言い換えて、次のように言う。

…政治家、科学技術者、経済人など日本の国力増強を担つた階層、医師や弁護士といった知識層——そういう人たちが、タオ的なものや、ミステリアスなものや、「氣」を含めた意味のスピリチュアル・エナジー(傍点引用者)をすっかり忘れてしましたね。(⑫85頁)

これは加島独特の老子『タオ』解釈であろう。

そうして彼が次に注目するのが女性である。加島は、「この三千年で女性の哲学者はほとんどいない」(⑫105頁)と云うが、それは女性の能力が低いからではなく、女性は『タオ』に近く、その意味ではスピリチュアル・エナジーを持つて生きているから、哲学のような純粋知に傾斜する必要がなかつたのだ、として次のように言う。

老子があまり考えるな、利口になるとろくなことがないと言つた裏には、そういうところ(≡哲学はいらない)があるような気がするな。(⑫105頁)

次に章を改めて加島が理解した「タオ」とはどのようなものか、もう少し具体的に見ていくことにしよう。

(2) 加島が理解した「タオ」

(2-1) エナジーとしての『タオ』

加島は、老子の「道」すなわち「タオ」とは、「宇宙の森羅万象あらゆるところに行き渡つている」(⑥47-48頁) 大きな力(「ライ

フフォー ス Lie force」とか「エナジー」ともいう)であるという。

そのエネルギーとも力とも言うべき「タオ」は「われわれの認識できる能力を超えたもつとはるかに大きなもの」であり、そのエナジーは「単にフィジカルなエナジーじゃなくて、精神的エナジーであり、両者が非常に密接に関連していて、分けられないもの」(1268-69頁)であるという。こうしたタオの理解は、まさしく伝統的な「氣」の哲学に通じるであろう。道を「氣」によって理解することは漢代からすでに行われていたから、加島のこうした理解は、実は伝統的な「道」の哲学の理解を出ていないのである。

そして「タオ」のエナジーが神秘に満ちているというのは、「無」を「エナジーに満ちた空間」と捉えているからであり、

タオのサイドから見れば「その何もなさこそがすべてを生むもとであり、むしろエナジーそのものを指している。」(1248頁)

とか、

名の付かぬ領域に満ちるエナジーとしか言えない。(1259頁)

として、道を「虚に満ちるエナジー」と定義するのである。もつともこのような「タオ」の解釈は、かつて「氣」を古代ギリシャ哲学におけるエーテル ether の意味に解釈した例があるように、これも彼の独創とは言えない。

「道」をこのように解釈した彼は、儒教の徳、換言すれば孔子の徳が単なる社会倫理に過ぎないとしたうえで、次のように言う。

無限定の「タオ」のエナジーと、その現れである「徳」のパワー

——この両方のダイナミズムによって、『老子』八十一章は構成されている。そういうわかり方をしてくるにつれて、老子と孔子の根本の違いがはっきりしたのだった。(1262頁)

こうした老子解釈には特に目新しさはなく、古代中国思想史研究者にとつてはよく知られたことなのだが、彼は独力で『老子』を読み込むことによつてこの理解を確かなものとしていったのであろう。

(2-2) 宇宙意識を内在する「タオ」[30]

老子の「道」の無限定性を、加島は宇宙的抜がりの中で捉えようとして、次のような大変面白い空想を述べる。

もし宇宙のどこかの星で「宇宙会議」が開催されたとすれば、地球の代表として誰を送るべきだろうか。代表にはブツダでもキリストでもなくて、老子こそふさわしい、なぜなら老子は、二千五百年前からすでに、国境や党派を超えた宇宙意識を持っている人だったからです。(12134頁)

さらに引用を続けよう。

「名のない領域」(原文では「無名」)——これこそ老子の宇宙意識のあらわれです。この領域からくるエナジーを、老子は「タオ」のパワーとしている。彼の内観力がとらえたのは、宇宙と地球の人間とを結ぶ生命エナジーの働きです。宇宙に遍満するエナジーは、地球のあらゆる人間にも働いている——そして彼はそのエナジーを仮に「道(タオ)」と呼んだのであり、この思想を持つ老子こそ宇宙会議の地球代表として、もつともふさわしい人に思えるのです。もしこの会議で「いま地球にとつて何が一番大切なことか」と問われたとしたら、老子は「不争」の二語で答えるだろうと思う。：「不争」の一言は、いま地球の人間界の実行すべきもつとも大切なポイントだと言えましょう。もちろん「争う」という人間の行為もまたタオの

エナジーの発現の一端です。：「不爭」こそいまの二十一世紀の世界にとって大切な思想であり、「今なんで、老子か」の答えとなるのです。もし世界がこの簡明な二語を守れば世界の大きな諸問題、飢餓や人口問題はかりか、宗教観の憎しみは消えていき、地球は、いや地球上の人間は、生き延びるだろう。

(5) 132 - 138 頁

ここには、なるほどと思わせる独自の視点が窺える。

(2-3) 女性原理を内在する「タオ」

加島は言う、

：老子という人は、かつて母権制社会の中でみんなが共に生きた時代の、あの優しい心性というのを知っていて、どんな社会が来たってそういう生き方ができるんだよということ伝えてよ  
うとした：だから今非常に新しいとも言える：。(6) 76 頁

ここで、加島が道に内在しているという女性原理（もしくは母性原理）を、次のような視点に立つて再評価していることに注目したい。

○二千年来、東洋と西欧の世界の男性優先主義 male chauvinism からきていて「柔らかなさ」「優しさ」を思想の中心にすえたものなど、どこにもなかった。林語堂は、老子の「柔弱」という言葉を英訳するにあたって、gentleness という語を当てています。僕はそれを読んだとき、「これだ」と思いました。柔弱には「優しさ」「ジェントルネス」という意味合いが含まれているからです。だから本来の「柔弱」とは、「しなやかな強さ」を表す言葉だった。これはまた女性原理のあり方そのものにはかなりません。(3) 205 頁

○柔らかなさというのは、女性原理のいちばんの特徴でもあり、

また「自然情報」の特徴です。女性はさらに、奪い、所有する、という男性的本能とは異なった、育み、分け与える、

という本能を、よりたつぷりそなえている。老子は、男13オ

スの働きを社会的な活動ととらえ、女性14メスの働きは、根

源の生命につながるとみた。老子は、この両者がひとりの人

間の中で調和すること——そのバランスというものを、非常

に大事と考えていたんです。(3) 208 - 209 頁

なぜなら、加島は古代から現代まで続く世界を、

父権制の社会、そこでは競争と排除ということを中心にした社

会がどんどんつくられていった。(6) 72 頁

と位置づけ、

競争というのは壮年期までが必要かも知れないから否定しない

けれど、それ自体は決して人間を幸福にするものではないんで

す。(6) 81 頁

と、いわゆる男性原理にその限界を見ると同時に、老子は、はやくもその点に気付いていたと高い評価を下す。

「萬物負陰而抱陽。沖氣以為和」(第四十二章) 老子はこう言っ

たとき、どっちにウエイトを置いたかというと、陰の方、アニ

マ15(女性性)の方でした。老子は「人々に母親の意識に帰れ」

と言ったのだと思う。その母親というのは、大きな意味での

「タオ的なるもの」なんです。それは母系文化から伝わってき

たものであると同時に、ネイチャーというもののあり方がそ

うものだと言うことを、老子は見えていた。母性には父権制文

化がつくってきたものとは別の、命の安らぎというものがある



——それは社会の向こうにあって、人間の中の深くに動いているものです。それは神秘的な力であるタオと結ぶものであり、その力の方がはるかにすごいんだから、競争するよりその力に任せたらどうか、と老子は言っているんだと思う。(⑧82—84頁)

そうして現代こそ、この女性原理の復活が求められるとして次のようにいう。

母権制社会には、平和で、柔らかな世界があった。そして今は世界が、母権制社会の持っていた和や優しさを復活させ、バランスを取ろうとしているんじゃないかな。(⑧126頁)

老子こそは、「母の優しさは、生命を『生むもの』すべての持つ優しさ」(⑧169頁)であることに気付き、またその故にこそ「柔弱」の価値を引き出すことに成功した思想家であるという。

### (3)「タオイスト」加島の誕生

かつて10年ほど前に、加島のこと朝日新聞に取り上げられ、彼は次のように言っていた。

私はアメリカ現代文学を主とした仕事をしてきた。五十代の終わりごろ、ふと『老子』の英訳本を読んだ。そして老子が、人間の生き方に深く滲みとおる哲理を語るのに打たれた。以来、この東洋古代の哲人に少しづつ入りこみ、今では自分を「新米のタオイスト」と称している。タオイストとは、老子の根本の原理であるタオ(道)につながって生きるものことだが、まだ私は半人前にも及ばない「新米」なのである。

老子はこう言う——「他人や社会を知るなんてことは薄暗い

知識に過ぎない。自分を知ることこそは本物の明るい知恵なのだ」。そんな明るい知恵が私のなかにわずかに差し込んだのも、ごく近年のことだ。また老子は言う——「道(タオ)につながる人(傍点引用者)は、今の自分に自足する、そしてそれを本当の富とするんだ」(加島訳『タオ—老子』三十三章)人は誰しも外側に目を向けて何かを求める。それが日常一般のことだけれども、外に向けての欲望を少しばかり抑えることもできる。欲望を減らせば、今の自分にやや自足する気持ちになる。するとその人の内側の心が開く。開いた心から、その人のなかに隠れていた潜在能力(ポテンシャル)が湧きだしてくる。老子は、それを富と言ったのだ。：

ここでは極めて簡明に、自分がタオイストであること。つまり「タオにつながる」生き方を志していること、「タオにつながる」人は、自足することができ、自足することによって、これまで隠れていた能力(≡潜在能力)が自己の内面から湧きだして彼の人生を豊かにすること、老子はそうした潜在能力を「富」と称していたこと、などを言う。こうして「タオイスト」加島は誕生した。

彼は『老子』という文献を、結局のところひとりの人間の生き方に深い示唆を与える人間の詩(③90頁)として読んでいるという。例えば、「躁勝寒、静勝熱、清静爲天下正」(第四十五章)については、

清々しい静けさ、それだけがこの世の狂いを直すんだ」一人一人が心のなかに「静けさ」を持つということが役に立つ。老子は徹底的なインディビジュアルリスト、個人主義の人ですよ。(⑥

という解釈を示し、また、

老子的に言えば、放つておいて「タオ」の力に任せれば、あなたの中の喜びと恐怖のバランスは、自然にうまく取れていく、ということになるでしょう。人間が頭でかちになって、やたらと恐怖を受け入れて、そこから発生しているストレスに悩むのを、彼は解消させる——そんなような哲学なんです。(⑥125頁)

と、そこに「大きな楽天主義」(⑥125頁)を発見する。

さらに「夫我有三宝。持而宝之。一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲天下先。」(第六十七章)については、

老子は、自分の大切にしている三つの宝がある、という。そのひとつは「愛すること」。二つ目は「あまり欲張らないこと」。三つ目は「人の先に立とうとしないで、自分のペースで生きること」。(この三つの宝は、考えてみるとみんな恐怖をいやすものなんだね。はじめの「愛すること」は、人の心にくいこんだ恐怖をとくす最上の方法です。二つ目の「欲張るな」は、恐怖につけ込む心理上のワナをとりのぞく原則ですよ。——とても有効なキメテだよ。三つ目の「人の先に立たずに自分のペースで生きる」というのは、具体的な、日常の生活で生じる恐怖心を、よっぽど軽減してくれる。老子は恐怖のことを考えて言っているんじゃないかも知れないけど、根本で、「タオ」の働きというものは、人間に深淺の恐怖を超えさせる思想なんです。

(⑥126-127頁)

と、さまざまな心の恐怖から自己を解放するための方法が説かれているという解釈を示す。

また「自愛而不貴」(第七十二章)については、

老子は、自分を愛することだ、しかし自分を誇ってはいけなく、と言っている。自分を誇って他を見下すということは、他を排斥すること、これは単なる「エゴイズム」なんです。自分の命を十分に愛するとき、その喜びの気持ちを他人にもシェアしたくなる。——老子はそういう愛のことを言っているのです。(⑥147頁)

という解釈を示して、ここからエゴイズムを越えた「愛」を導き出す。

また、『老子』の中でもよく知られている「報怨以德」(第六十三章)の「徳」については、

英訳は *Indignities* (親切な心) を用いもありますが、老子の「徳」は道の現れとしての「自然の流れ」のことです。怒りや怨みは自然の流れの力 *power* に任せれば、次第にとけ去るもの、やがては忘れ去るものだ——こう解せば老子の「徳を以てせよ」の意図が私たちにわかります。(⑧31頁)

と、先の「愛」に示した解釈に通じる理解をしてみせる。さらに、「知足者富」(第三十三章)の解釈についても見ておかねばなるまい。加島は、

老子は、足りることを知ることが富、と言っています。しかしこれらの言葉は、たいてい誤解されているようです。自分が満足すれば、それでいいんだ、ぐらいに思われていますね。でもじつさいは、「足りることによって自分のなかに富を見つければじめる」という意味だと思っんです。これはすごい言葉だと思えます。足りることを知るとは、物質の富から、自分の心の富へ、

の・転・換・な・ん・で・す。自・分・の・な・か・の・潜・在・能・力・の・発・見・な・ん・で・す。た・ん・なる・物・質・的・な・豊・か・さ・を・指・す・の・で・な・く、精・神・の・豊・か・さ・と・深・さ・、そ・して・何・よ・り・も・自・由・を・表・す・言・葉・で・す。(傍点引用者)(中略)自足は、英語では self-sufficiency と訳されることが多いのです。この言葉には、the inner balance (自己の内なるバランス) というニュアンスが濃厚に含まれることも、言っておきたいと思いません。」(③154-155頁)

こうした解釈は、加島独特のものであるといつてよいであろう。なぜなら、この「知足」を通じて彼は、自己の内面に潜む潜在能力に気づき、その潜在能力を開花させることに現在もつとも力を注いでいるからである。そうして、こうした『老子』解釈に自信を得た加島は、今こそ日本人に老子の思想が求められていると公言するのである。

では「日本の人々にとつて、今、なんで老子か」この問いへの答えは、『老子』の中から、…ひとつだけあげるとすれば「自足」の二字でしょう。それには「知足者富」(第三十三章)の一句をあげたい。…老子は心の内側のものを見て、「富ム」といつているのだと、私は解しました。誰だつて物質的満足は必要であり、老子もそれを否定しない。けれどもひとたび衣食住が足りたら、今度は、自分の「内なる自由」を見つけ出すべきだ。自分の心が自由であるのを見つけたとき、あなたは自分が真に豊かで、富んでいることを知るだろう。——なぜならあなたは他人に何かを求めるのではなくて、自分の中から限りなく湧き出すものを見つけるからです。(⑤138-139頁)

たしかに、今の日本人に求められるのはこれ以上の物質的豊かさ

ではなく精神的満足であると言つてよいであろう。人々の心の飢えをどのようにして満たすことができるか。それには、まず心の自由を取り戻さなければならない。心の自由こそ自分を豊かな境地に連れて行つてくれるというのである。自由と豊かさは常に一体であり、その自由と豊かさの中にこそタオのエネルギ―は存分に発揮されるというのが、タオイスト加島の結論なのである。

## 結

タオイスト加島の詩集『求めない』がベストセラーになったことを紹介した。彼がこの詩集で言いたかったことは

社会に認められる価値を目的にやるんじゃない、自分の心の内の価値にしたがつて生きた、ということの方が、よほど  
だいじだと今の僕は思っています。(③57頁)

ということからも窺えるように、「求めない」とは外に向かつて求めないということであり、自己の内面に隠れていた才能、すなわち彼がポテンシャルと呼ぶものであり、そしてそれは、外に求めている間は自分ですら気づかないもの、それに気づき、そしてそれを存分に引き出すことだという。

なぜ、自分の内部に、自分自身ですら気づくことのなかったポテンシャルティが潜んでいるというのであろうか。そのポテンシャルティとは何か。彼はそれこそ宇宙に遍満するタオ＝道のエナジーなのだという。

つまり、自己自身の中に「タオ」が存在することに気付いたとき、人は外に向かつてはもう求める必要がなくなるといふのである。例えば、金銭・地位・名誉など。だがそのためには、偉大なタオのもの

つパワーの大きさを知らねばならないという。

彼は、内なるタオのエナジーは外に向かって求めなくなれば自然に発揮される、と言う。つまりはこういうことだ。外に求め続けている間は、タオの偉大さに気付くことができない。そして、外に向かって求めなくなったとき、人は自分自身の価値に気付くのだ」と。

自然界の様々な現象、例えば風が吹き渡り、木々がざわめき、花々が咲き誇り、虫たちがその中を飛び交う。実はこれらすべてがタオのエナジーに因るのだ、と彼は言う。

だが、加島がタオのエナジーをこのように言うとき、これまで人間がさまざまな人智の限りを尽くした作爲も実は、それ自体タオの働きであったとは言えないのか、といった皮肉な疑問も浮かんでくる。すなわち、人間の欲望や意志はそれ自体人間に特有のしかも自然に発生するものである以上、タオのエナジーが作り出したものと言えるのではないかと。

しかしこうした意地悪な反問も、だがもしそうならば、人は「知足」なくひたすら欲望のままに作爲することによって、また「柔弱」ではなく「剛強」をよしとすることによって、また虚栄や焦燥、戦争や反目によって、満ち足りた世界を作り上げることができたはずであるというだろう。だがそうならなかったのは、人はやはり自らの手で偉大なタオのエナジーを台無しにしてしまったからだ、と直ちに反論されることであろう。

なお、小論は二〇一〇年九月九〜十一日中国河南省洛陽で開催された『老子文化国際論壇』において、「現代日本対《老子》的受容―以加島祥造的著作为中心―」と題して提出した論文を骨子として

いる。

## 附録

本論で紹介した加島祥造詩集『求めない』が、読者からどのような感想が寄せられているかを、インターネット上の書評コーナーに寄せられたレビューから抜粋して紹介しておく。これによって彼の『老子』理解が現代日本社会においてどのように受け止められているか、その一端が窺えるはずである。

①「求めない――すると、本当に必要なものが見えてくる」など、著者が日々書き留めたすべてが「求めない」で始まる詩約100篇を収録した詩集。著者は、「ほんの3分でいい、求めないでーらん。不思議なことが起こるから」と語りかけます。幸せに生きるための知恵が詰まった詩集です。

②：求めないと言う事を意識し始めたなら求めていた時には手に入らなかったあらゆる現象が引き寄せられて来ました。私は求めていた事で逆に多くの物を失って来たのだと思いました。：求める心の後ろには欲望があり自分の人生は自分で造るんだと言う傲慢さがあり、求めない心の後ろには全ての出来事や存在に感謝すると言う謙虚さが生まれました。草や木や水や空気そして日の光と。求めずとも自分に取って必要な物は与えられ、与えられない物は必ずしも必要でないと言う事だと思います。：釈迦や老子の流れにも通じます。：

③タオイズムを経てたどり着いた彼の境地が静かに語られている。

2010.07.12 稿了

2011.08.28 改稿

…

④…私の次から次へ沸いて出ていた欲望は、こんなに短い言葉で、さっと冷めさせられてしまった。この本はすごい。物が溢れた豊かな今の時代だからこそ、世代を問わず、性別を問わず、ぜひにこの本を手にとつて欲しい。求めないことが、実はしあわせへの近道だということ。私は自分では思いつきもしなかった。…

⑤「求めない」ということは、今のままでじゅうぶんと知ることなんだ」なかなかできないことですが、この考え方に挑戦してみたいと思います。求めない―/体と心を楽にしてくれる。/いまの自分が大切になる。/心が広くなる。/心が静かになる。/求めたときは見えなかったものが見えてくる。

…実践は難しそうだけれど、いつも頭に入れておいたら、行き詰った時などに道を指し示してくれる本だと思いました。

⑥…「求めず」「足るを知る」という生き方は、なんと難しいことでしょう。この境地に至るのは容易なことではありませんが、これからの時代を生きる上で、本当の「豊かさ」はその生き方の中にあるのだろうか。私は思います。…

⑦「求めない」―この題名を見たとき、吸い込まれるように手に取っていました。

求めない/すると自分が自分の主人になる/だつて求めるかぎり/君は、求めるものの/従者だもの

このわずかなフレーズの中に、どれだけものが凝縮されているでしょう。愛、地位、名声、お金…どれをとつても、その従者になつたとき、「すがりついてしまふ」怖さがあります。…

⑧加島さんは、英訳「老子」に目を開かされて以来、何回も何回も

老子をお読みになり、住まいさえ横浜から伊那谷に移されて、老子を深く読み解いてこられました。最近のご本には、老子の紹介から次第にご自分が血肉とされたタオイズムを語ってくれる傾向が強くなっておりましたが、この本に至つて、今の世に生きる老子思想として「求めない」という核心的境地に辿り着かれたようです…

⑨…一瞬のうちに頭の中にとびこんでくる簡単な言葉。そして、時間を経ると新書や哲学書よりも深い思考がわきはじめて自分への問いかけが始まる。淡泊な表現から濃厚な思考の世界に一気につれだしてくれる、そんな本だと思いました。…

⑩求める事をやめると、色々なものが見えてくるのがわかる。必要でないものは消え、考え方においては、フェアな判断をするようになる。心に響いたのは、大切なものは、今、持っているものの中にあるということだろう。忙しさの中で、何かを見失いそうになつたときに読み返したい。

註(1) 加島祥造 一九三三。氏の「老子」理解は、主に以下の著作にあら

われている。

①『タオ・ヒア・ナウ「老子」』(PARCO 出版1983)

②『伊那谷の老子』(淡交社1995、朝日文庫2004)

③『老子と暮らす 知恵と自由のシンプルライフ』(光文社2000、光文社知恵の森文庫2006)

④『タオ 老子』(筑摩書房2000、ちくま文庫2006)

⑤『いまを生きる 六十歳からの自己発見』(岩波書店2001、改題『老子までの道』朝日文庫2007)

⑥『タオにつながる』(朝日新聞社2003、朝日文庫2006)

- (7) 『タオと谷の思索』(海竜社 2005)
  - (8) 『肚 老子と私』(日本教文社 2005)
  - (9) 『エッセンシャルタオ 老子』(講談社 2005)
  - (10) 『莊子 ヒア・ナウ』(PARCO 出版 2006)
  - (11) 『ほっとする老子のこぼれ いのちを養うタオの智慧』(二玄社 2007)
  - (12) 『静かさにかえる』(風雲社 2007 帯津良一対談)
  - (13) 『LIFE』(PARCO 出版 2007)
  - (14) 『求めない』(小学館 2007)
  - (15) 『私のタオ 優しさへの道』(筑摩書房 2009)
- 上掲十五種の著作は、おりおりのエッセイであったり、詩であったり、また『老子』本文の現代語訳である。すべてに涉って氏の『老子』理解が述べられている。なお、本文中、上記著作を引用する場合は著作番号(1)~(15)によって示した。
- (2) 京都・竜安寺(谷中撮影)



(3) 過労死 その実態はなお明らかではない。例えば、「過労死の統計は存在しない。しかし、過労死10番がその活動を通じて把握している現状では、過労による精神障害に陥って自殺した人は年間五千人以上、その予備軍ともいえる精神障害を持った人は常時数十万人いることが考えられるという。」(日経BPNet特集「働きすぎ」の自覚がある人は要注意―労災認定・過労死の現状。まじめなほど、過労による健康障

害・精神障害のリスクは高まる」の記事 <http://www.nikkeipp.co.jp/sj2/special/115/2006.03.09>)

- (4) タオイズム Taoist
- (5) 本人の風貌 (<http://blog.friobiz/?cid=1188376>より)



- (6) タオ 道・Tao
- (7) エネルギー energy
- (8) タオイズム Taoism
- (9) ヒューマンステイック humanistic
- (10) アーサー・ウェレー Arthur Waley (1889-1966)
- (11) 西洋から東洋へと回帰「ところで「近代の超克」を掲げて、東洋思想に着目するのは20世紀以来の日本における知的伝統であり、必ずしも珍しいものではない。
- (12) ポテンシャルティ potentiality 潜在能力
- (13) アニマ anima
- (14) 「柔弱」の価値 加島は、この「柔弱」の意味に触れて、「柔」とはそもそも「しなやかな強さ」を意味するのであり、「弱」は「女性のしなやかさ」を意味すると解釈している。